

〔八丈島特産園芸作物における生産振興技術対策〕
新規導入を目指したレイ・プランツの生育特性の把握と施設栽培技術
～オキナワウラボシの生育に適した遮光条件～

中田亜由美・菊池知古
(島しょセ八丈)

【要 約】オキナワウラボシを 19, 34, 50%の遮光条件で栽培すると、遮光率が高まるほど出芽数、収穫枚数は少なくなるが、可販化枚数に大きな差は見られない。出荷不可となる主要因は1月から7月までは黒変、8月は孢子の発生による。

【目 的】

オキナワウラボシの八丈島での試験栽培ではこれまで 50%程度の遮光を行ってきたが、「自生地では日当たりの良い岩上、やや乾燥した岩場や崖上に生育し群生する。」とある(日本山野草・樹木生態図鑑シダ類・裸子植物・被子植物編)。本試験では、オキナワウラボシの異なる遮光条件下における収穫枚数および品質を明らかにし、生産者が栽培する際の知見とする。

【方 法】

ビニルハウスに遮光率 19% (商品名:TN-60)、34% (TN-30)、50% (TN-56) の青色遮光ネットを外張りした(以下、19, 34, 50%区とする)試験区を設け、2011年9月に、20cmに切った地下茎を、株間 25cm、条間 30cmで定植し、1区 40株の2反復とした。施肥はIB化成 S1号を2ヵ月ごとに株あたり 3.75g 施用した。

2012年9月から月に一度、葉先まで完全に展開し葉色が均一になった葉のうち、1/2に当たる枚数を収穫した。2013年2～4月は収穫を行わず、7月に傷んだ葉を全て整理した。出芽数、収穫枚数、および収穫葉について調査した。

【成果の概要】

1. オキナワウラボシは全ての遮光区とも地下茎を定植してから葉が茂り収穫が可能となるまでの期間は1年を要した。
2. 毎月の出芽数は全遮光区とも同じ傾向で推移し、遮光率が低いほど数が多かった。1, 2月の出芽数は全遮光区とも認められず、全出芽数の半数以上が3～5月の期間に集中した(図1)。
3. 遮光率が高まると、総収穫枚数は少なくなったが、秀品と優品の割合は増加した。可販化枚数は全遮光区とも650～730枚/40株となり、処理区間の差は小さく、毎月収穫枚数も同様の傾向を示した。8月で最も多くの収穫が得られた(図2, 図3)。
4. 34%区で出荷不可となった要因の内訳をみると、1月から7月まで葉全体または一部の黒変、8月は孢子が主であり、他の区も概ね同様の傾向を示した(図4, 図5)。
5. まとめ: オキナワウラボシは遮光率が高まるほど出芽数、総収穫枚数は少なくなるが、可販化枚数に処理区間で大きな差は見られない。出荷不可となるのは1月から7月までは黒変、8月は孢子の発生が主な要因であった。

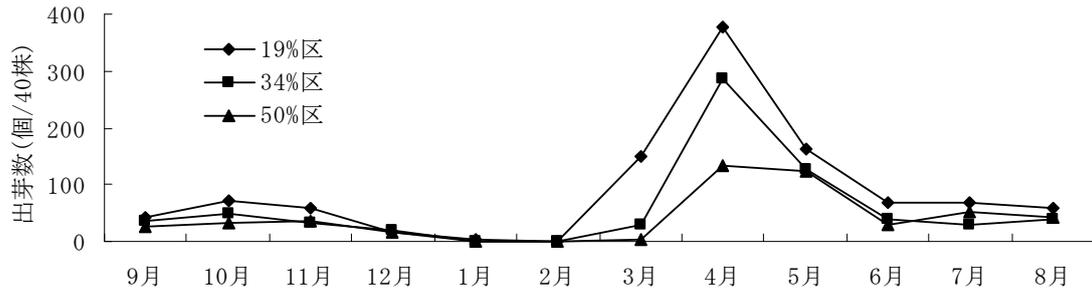


図1 オキナワウラボシの異なる遮光条件と出芽数の推移
(出芽数：調査日当日の芽数，3～7 cmの未展開芽の数)

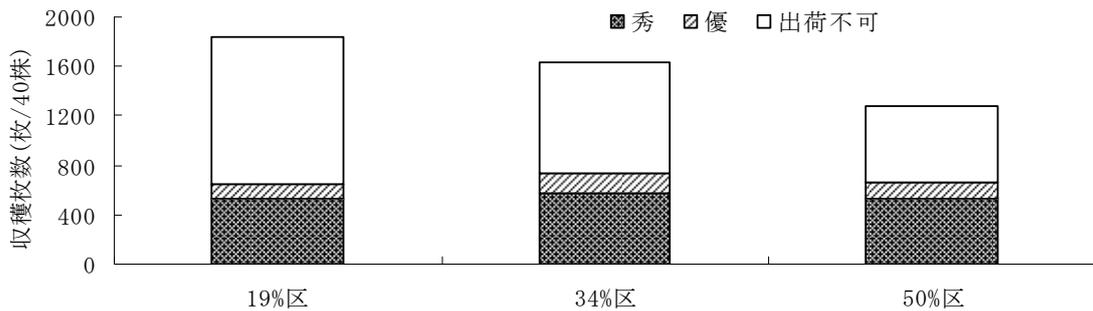


図2 オキナワウラボシの異なる遮光条件と年間收穫枚数

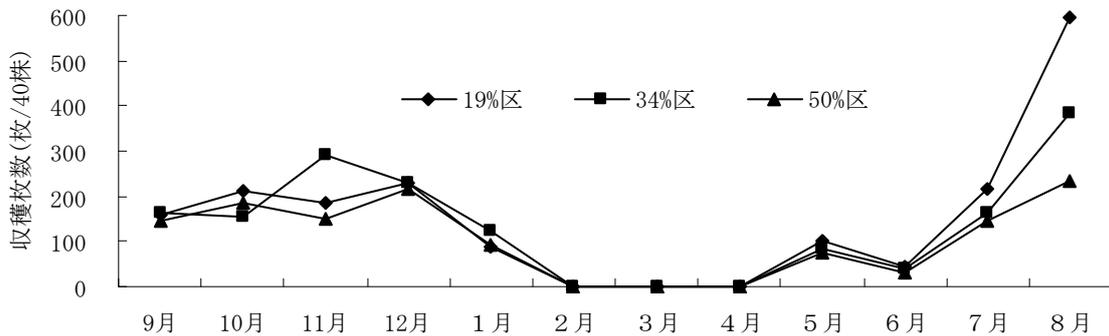


図3 オキナワウラボシの異なる遮光条件と月別收穫枚数



図4 黒変した葉

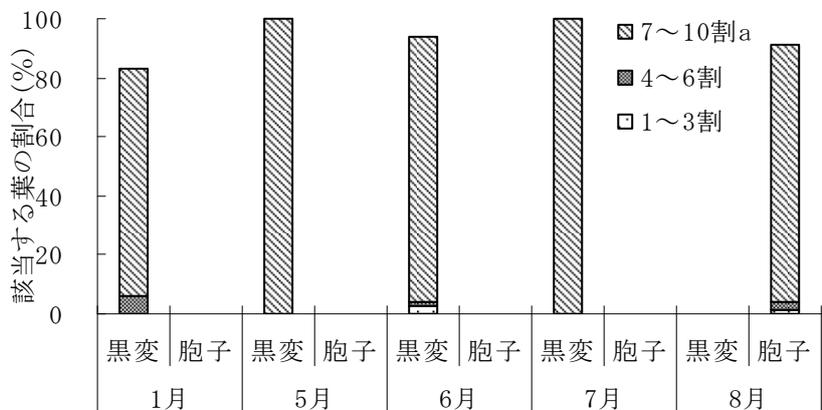


図5 オキナワウラボシの 34%遮光下における葉の黒変および胞子形成割合

a) 收穫葉あたりの黒変および胞子形成が見られる羽片数が全羽片数に占める割合